

争議のきっかけは労働協約改定をめぐる、労働者の組合加入を義務付ける「条件付きユニオンシヨップ制」を、組合加入は労働者の自由意思に任せる「オーブシヨップ制」に改めようとした労使交渉が、決裂したことにあった。

田中が春日井工場長になったのは、争議がはじまり六か月たったころだった。ちょうど中央労働委員会あっせん案を労使が受け入れ、ストは一時中止していた。しかし組合側では休戦中にもかかわらず、職場闘争とあって、本部の指令なしに下部組織が分散的にストを行う「山ネコスト」を波状的にくり返していた。



春日井工場の事務所周辺でデモを行う組合員  
(写真提供 王子製紙株式会社)

入社以来、山林部門で育った田中は、労使問題は全くの素人。いろいろ考えても、経験がないのでいい知恵も浮かばない。こうなると、腹をすえて体ごと正面からぶつかるしか方法はない。田中は組合役員を前にしてこういった。

「君らが中労委あっせん後の延長戦ではじめた職場闘争は、審判の目をごまかして一点先取りしたようなものだ。私はこの一点をどうしても取り返す。バットを一度も持ったことのない、ピンチヒッターだが、命がけて球筋を読み、たとえテッドボールでも望みが出る覚悟だ……」

### ●全工場に緑の記念碑

気迫もあったが、腹をわった話し合いもした。それから得た労使関係の「哲学」は、「まず人間関係、愛情と信頼で結ばれることの大切さ」であることを田中は痛感したという。

信頼にこたえた組合も大きく変わった。スト前の組合員は、その大半が労働協約を読んだこともなく、ただ組合幹部のいうままだった。それがスト後は協約や組合規約も読み、組合の方針にはよく考えて賛否を決めるようになった。長期ストで払った犠牲も大きかったが、新しい人間関係、労使関係が打ち出された。それが王子製紙の最大の経営資産となって、その後の発展に結びついた。

争議のあとの役員会で、田中は常務に抜てきされ、その四か月後には専務、さらに社長、会長へと進んだ。一九七三（昭和48）年、王子製紙は創立百周年を迎えた。田中は社長として全社に呼びかけ、各工場に記念碑を建てた。その碑文につたわれた緑化宣言は、二世紀目に踏み出した王子製紙の誓いでもあり、田中自身の固い決意でもあった。彼は高らかに宣言した。

「人よ、緑とともに生きよう」



緑化宣言の碑文  
(写真提供 王子製紙株式会社)

### 参考文献

田中文雄他 『私の履歴書』 経済人22 日本経済新聞社  
田中文雄 『王子とともに五十年』 日本経済新聞社

.....

(中村勝実)

## 佐久の先人たち<sup>34</sup>

### 緑とともに生きた生涯

た なか ふみ お  
**田中文雄**

(1910~1998年)



「太陽は緑を呼び、緑は平和と生長のしるし……」。王子製紙の社長だった田中文雄は、同社の創立百周年記念碑にこう刻んだ。彼は緑が好きだ。その緑多き木材を原料とする製紙業界の道を歩み、緑とともにその生涯をつらぬいた。

#### ●赤紙も航機要員で免除

田中は平賀村（現佐久市平賀）の出身。父は地元の小学校長などを務めた教育者で、九人兄弟の末子。名古屋の旧制第八高校（現名古屋大学）から九州帝国大学（現九州大学）林学科を出て、一九三五（昭和10）年、王子製紙に入社した。当時の王子製紙は、「製紙王」といわれた藤原銀次郎（長野市出身）が社長で、国内市場の八〇％を抑える、文字通り独占的な大製紙会社だった。

最初の勤務地は、北海道苫小牧工場の山林部。山の

中の造林小屋に寝こまりし、買い付けた木材を測り、伐採の工夫や造林を監督した。山は最寄りの駅から三〇分近くもあり、人が通れる程度の寂しい山道を歩く。途中で熊に出会わないように、会社が支給してくれた豆腐屋のラッパを吹き鳴らしながら歩くのが日常だった。



北海道山中の山小屋  
(写真提供 王子製紙株式会社)

山の仕事も六年目、一九四一（昭和16）年夏、突然

ドイツへ出張を命じられた。中国との戦争も激しくなり、木材統制法制定準備のため、先進国、ドイツの実情視察のためだ。ところが途中の大連まで行つたところで、独ソの開戦でドイツ行きは中止。その行きがかりで統制会社の北海道木材へ出向となった。

太平洋戦争がはじまり、木製飛行機を造るため、新たに航空機材課が設けられ、その課長となった。たまたま軍需省と協議のため上京中、彼のもとにも「赤紙」（召集令状）が来て、そのまま富山連隊に入隊した。ところが入隊三日目に呼び出され、「軽い肺浸潤」を理由に即日帰郷となった。病気そのものはいしたことはなく、飛行機の生産を重要視する軍需省が出した「航機要員」の申し入れ書がモノをいったようだ。後で聞けば、ビルマ（現ミャンマー）で半分が戦死した部隊もあったという。

戦後は統制会社の解散業務に当たり、これが終わると、もといいた王子製紙に帰り、山林部技術課長から山林部長となった。

#### ●気迫の話し合い交渉

山林部長にとって一番の難題はパルプ材の不足だった。そこで、北海道に持つ六万六千畝の社有林を有効に使う、パルプ材を造成する「社有林三十年経営計画」をたてた。これにそって毎年一千畝の植林をはじめた。

このさなかに起こったのが、一九五九（昭和34）年一四五日にわたる王子製紙のストライキだった。この争議は単に一王子の問題ではなく、資本主義社会のなかの労働組合のあり方について、大きな課題を投げつけた。歴史的な争議だった。